

UNSCEAR2013年報告書*のフォローアップ

- 第1段階：・第1報の白書（報告書）の公表（2015年10月）、
・第2報の白書（報告書）の公表（2016年11月）
- 第2段階：適切な時期に2013年報告書の更新の必要性を検討

概要

新規情報、データによるレビュー

2013年報告書の主な仮定、知見を再確認

2013年報告書の主要知見への実質的影響なし

さらなる解析や研究の必要性を提言

2013年報告書の重要結論には変更の必要はなし

* 「2011年東日本大震災後の原子力事故による放射線被ばくのレベルと影響」（2014年4月2日）

UNSCEAR2013年報告書以降に公表された情報のレビューで得られた知見から、新規情報のUNSCEAR2013年報告書への影響、研究・調査の継続等の影響を紹介

「放射性核種の大気中への放出、拡散、沈着に関する更新情報」について

- ① ソースタームの推定値のほか、大気中および地上に沈着した放射性核種のレベルの推定値が有意に改善される可能性:

経時的なヨウ素131、セシウム134、セシウム137 の大気中濃度、土壌サンプル中のヨウ素129の測定値に基づくヨウ素131の沈着、及び放出されたヨウ素の化学形についての新規データが入手可能になりつつある点に着目。

- ② 2013 年報告書で特定されたニーズへの対応に寄与する可能性が高い分野の研究を特定:
放射性核種の大気輸送や拡散モデルに関する研究等

UNSCEAR2013年報告書以降に公表された情報のレビューで得られた知見から、新規情報のUNSCEAR2013年報告書への影響、研究・調査の継続等の影響を紹介

「公衆の線量評価に関する更新情報」について

① 結論:

2013年報告書の当該分野における知見は引き続き有効。それ以降に発表された新規情報の影響をほとんど受けていない。

① 2013年報告書で確認された研究ニーズへの対応に寄与する可能性が高い調査等を特定:

さまざまな環境での沈着物質への外部被ばくによる線量率を継続的に測定、予測し、経時的な変化を追跡する等いくつかの分野での調査等

UNSCEAR2013年報告書以降に公表された情報のレビューで得られた知見から、新規情報のUNSCEAR2013年報告書への影響、研究・調査の継続等の影響を紹介

「作業者と公衆における健康影響に関する更新情報」について

① 結論：

2013年報告書の当該分野における知見は引き続き有効。新規情報の影響をほとんど受けていない。放射能を原因とする甲状腺がんのリスクに関する本委員会の知見に異議を唱えたように見える1編の調査には、重大な欠陥。

② 2013年報告書で特定された研究ニーズへの対応に寄与する可能性が高い分野等を特定：

福島県での甲状腺検診プログラムの知見を適切に理解するには、福島第一原発事故の放出による影響を受けていない同等の日本人集団を対象とした十分な規模の調査結果との関連性においてそれらの知見を検討すること等、さらなるデータまたは情報が2013年報告書で特定された研究ニーズへの対応に寄与する可能性が高いとして特定。

結論（総論）

- ① 評価された新しい情報源の大部分が、2013年報告書の主要な仮定の1 つまたは複数を追認するものであった。
- ② 実質的に2013年報告書の主要な知見に影響を及ぼしたり、主要な仮定に異議を唱えたものはなかった。

結論：「2013年報告書に対する潜在的な異議」に関するもの

- ① ソースタームおよび大気と地上に沈着した放射性核種のレベルの推定値が、日本原子力研究開発機構により得られた最新情報によって大幅に改善される可能性が大きい。
- ② ヨウ素の3つの異なる物理化学形（元素状、有機状、粒子状）での放出も考慮に入れたソースターム推定の最新情報は、避難者の推定線量と甲状腺への推定線量の精度についての議論に寄与する可能性がある。
- ③ 甲状腺がんの発見率が増加したことを実証したと主張する論文は、その調査に重大な欠陥が指摘され、他の調査と一致しないことが確認された。
- ④ ヒト以外の生物相に対する個体群レベルでの影響を報告した他の文献は、2013年報告書のこの分野の知見を支持するものであった。引き続き学際的な調査の必要性を提言した。